

引田 渙也 選

秋田 美津子 作

四万十に舟漕ぎ出でて鮎はやし
吾の行く行く手行く手に黒揚羽
蠟燭のともる内陣や梅雨の闇
漆黒の闇夜にひゅんと流れ星
仏像の塵払はるる師走かな

鈴木 久米男 作

池おおう落花漕ぎ行く二人かな
かがり火に吐き出す鮎の影暗し
橋上の一目千本霞雲
冠雪の山脈背に燃ゆ紅葉かな
手袋に息吹きかける寒さかな

長岐 途夢 作

定年を迎えし君に花吹雪
仰ぎ見る子等を観察つばめの子
本棚にうつすら塵の師走かな
初雪や乾きし土にしみ透る
少しづつ白の重ね着秋の空

西 修一 作

三が日明けて静けき二人膳
橙を採りたし棘の先の先
緑濃き香取の宮の残花かな
べらぼうめ響きも粹に穴子寿司
今を生きる思い定めし秋の空

引田 渙也 作

一切は白き静寂桜満つ
散る桜追う幼児を追う仔犬
独り居の月見の宴や酒五勺
木守柿高みに残し夕陽燃ゆ
客待ちの酒場暖簾に師走風